

青嶺 Seirei

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

一年を折り返し、実り多き後半へ

四月から新しい年度になり、一年のちょうど半分が過ぎました。各学年とも仲間達とともに行事に取り組んだり、日々の授業を頑張ったりとそれぞれに大きく、たくましく大人へと成長しているようです。

実りの秋へ。これからは勉強もそのほかのことも、これまでの取り組みをベースとして、さらに積み重ね磨き上げて、より高みを目指す時期です。限界を自分達で設けることなく、何事も自分から、そして前向きに楽しめる良いですね。

学生時代を振り返ってみたら、大変なことやきついことを途中、衝突しながらも一緒に乗り越えて創り上げた仲間との思い出が一番心に残っています。ぶつかることを恐れすぎず、自分の主張をしてみてください。そして皆で納得するまでとことん考えていってください。きつとその経験が将来生きてくるでしょう。

「ちよっとだけ無理をする」

激しい痛みがありましたがお世話になっての方のテーパーングのおかげで出場にこぎつけました。予選は再び足を痛めないように走り、練習不足でなかなか動かせませんでした。痛みは思ったよりひどくならず、次のリレーに臨みました。五十代がスタートで、四十代、三十代、二十代とバトンを繋ぎます。痛みはありましたが何とか走り切りました。予選は4着となり、決勝進出は微妙でしたが、私が走ったBチームも山崎さんのAチームとともに伊万里は二チーム決勝に進みました。決勝は外のコースの有田を追い全力で走りました。アキレス腱の痛みはあまりなく、自分の走りができていたのですがバトンを渡す手前で右太腿裏、続いて左太腿下部が肉離れになり痛みを襲われました。失速しながらもどうにか次の走者に渡せました。決勝は五位、Aチームは二位でした。走り終えてから感じたことは「ああ、やっぱり陸上競技はいいなあ、レースはいいなあ」でした。痛みと向き合いながら、ギリギリまでどうすればリレーで走り切れるかを繰り返し考えました。棄権を避けバトンを繋げるために何をすべきか、しないべきかを真剣に考え、実行しました。私の陸上人生はケガの連続でしたが、これまでの自分を超えようとしたら、それまでとは違う、それ以上の努力や練習をしないと超えられないと思います。

人と人が支え合う

自分を追い込むため「少し無理をする」ことの繰り返し。ケガと背中合わせかもしれません。しかし、努力の積み重ねの結果、自分が無理だ、と思っていた領域の結果が出たとき、それまで頑張ってきた自分を信頼できるようになりました。今の年齢で身体的な能力は落ちていますが、この数か月は試合に臨む準備をし、純粹に競技のことだけを思い続ける豊かな幸せな時間でした。また新たな目標ができたので、それに向かい努力を重ねたいと思います。また、いつか報告します。

前回、マイトシップの話をしたが、それを最も実感したのが、大陸最北端ケープヨークでの出来事でした。その岬の先端から見ると海がとても美しいという噂話を聞き、ケアンズから千km離れた岬の先までバイクを走らせました。途中の道はほとんどが未舗装路です。四日で走りきる計画を立て、スタートしました。悪路に苦しめられ何度も転倒しながら、全行程の半分ほどにきてアチャーリバーを超えなければならなくなりました。川幅は十五メートルで深さは膝くらい、一番浅かった岩場のルートを選び、ゆっくりと岩場を超えていきましたが川の真ん中で後ろのタイヤが岩の裂け目にはまり、押ししても引いてもバイクともしなくなりました。もしバイクを倒して水没させてしまうと、エンジンに水が入り、そこで旅は中止になります。前日宿泊した場所までは三十キロはあります。そこで歩くか？？気温が四十度を超えていて、途方に暮れて地図を見た、向こう岸にモレトン電話局という記載がありました。砂地を歩き、金網で区切られた電話局にたどり着き、大きな声で呼びかけるとその職員が出てきてくれました。事情を話し現場を見に行くと、人の力や無理とブルドーザーに乗って戻ってきました。丈夫なロープでバイクを縛り、ブルドーザーで持ち上げ、対岸まで渡してくれました。お礼を言った僕に笑いながら大丈夫だ、誰かが困っていたらお前が手を貸してあげればそれでいいんだ。オーストラリアを楽しいよ！と天然のマンゴーを無料で僕に手渡し、そのまま去っていきました。その後も困難に直面すると、誰かが手を貸してくれ何度も命拾いをしてきました。ただ微力ながら誰かにお返しをすることもできました。困っているときはお互い様、支え合って生きる人間を本当の意味で実感した僕にとつての原体験でした。